

平成22年度

第36回 越谷市民まつり

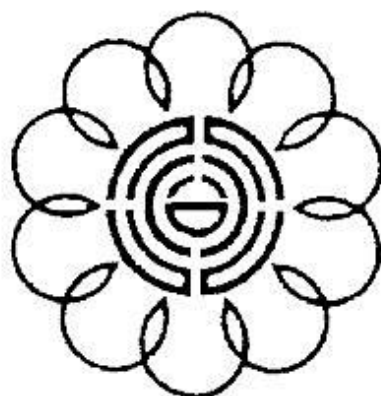
NPO法人・越谷市郷土研究会

展示出品紹介

越谷市中央市民会館4F

平成22年10月24日(日)

午前8:50～午後4:00



『古絵図に見る^{しかそん}四ヶ村用水と^{やこた}谷古田用水』

加藤幸一

『越谷・春日部周辺の農作物の^{しにょう}屎尿の供給』

高崎 力

『東武線の手まり唄』

原田民自

『越谷市内の^{さかさかわ}逆川の水量減少』

山本泰秀

古絵図に見る四ヶ村用水と谷古田用水

加藤幸一

四ヶ村用水

四ヶ村用水（しかそんようすい、しかむらようすい）は、古絵図を見ると、江戸時代は、瓦曽根村の鎮守である稲荷神社の西側のそばの瓦曽根溜井より取水し、照蓮院の裏、西側を流れて日光街道に入り、その後は日光街道の道路東側に沿ってずっと南下し、出羽橋（現在の蒲生橋）で出羽堀に合流。さらに南下して綾瀬川に流れ注いでいたことがわかる。日光街道の道路西側に沿って南下していた「西堀」が、途中、日光街道の道路下をくぐって四ヶ村用水に合流していたこともわかった。四ヶ村用水は、かつては、瓦曽根村、西方村、登戸村、蒲生村の四ヶ村の田畑の用水として利用されていた貴重な水路であったのであろう。

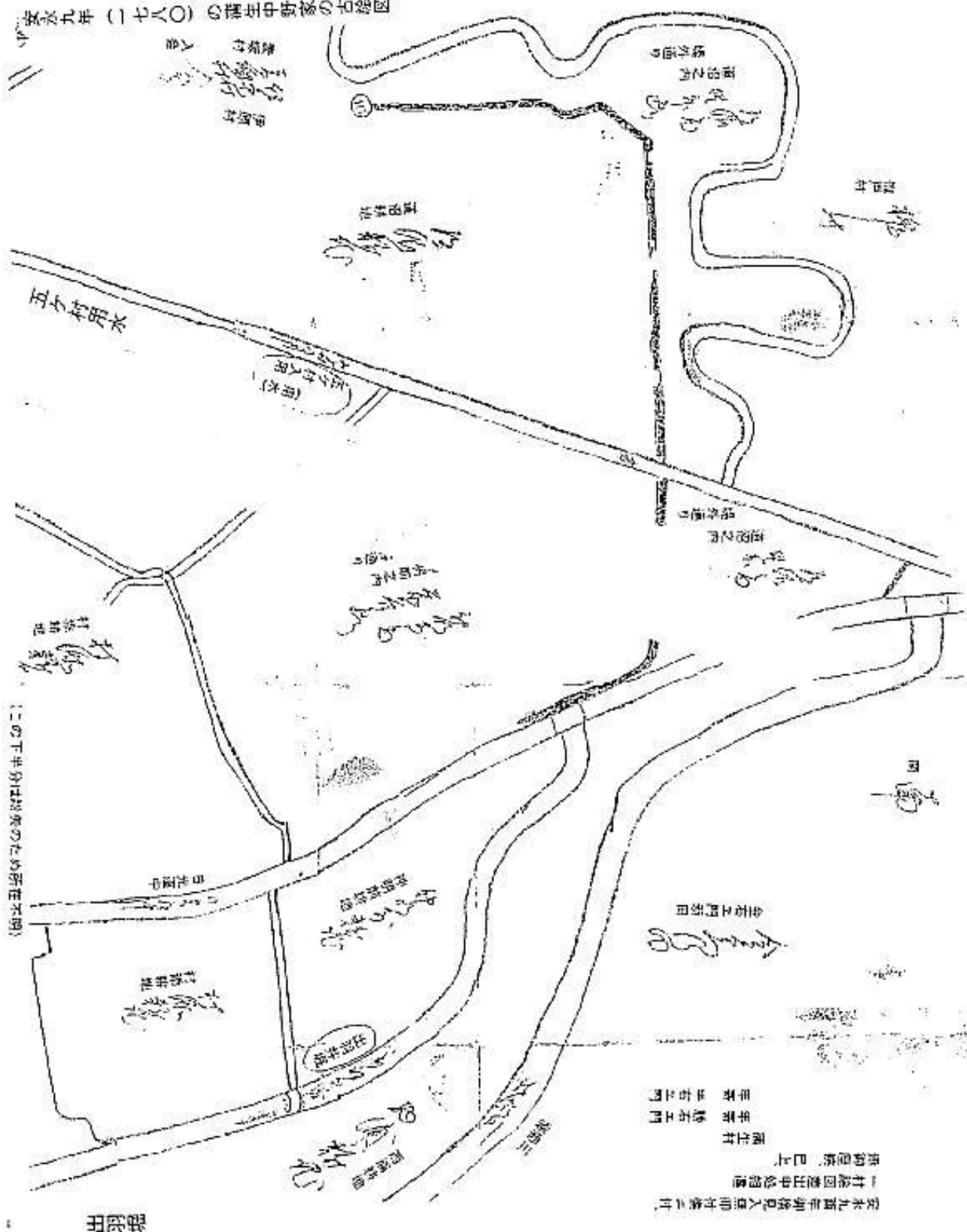
「四ヶ村用水」の読み方については、地元で呼ばれてきた「しかむらようすい」が定着しているようである。しかし、「しかむら」を初めて耳で聞くと「しか村」という村の地名としてとらえやすいので、「しかむらようすい」と呼ぶのは不自然である。それに、村の数は、「いっかそん」、「にかそん」、「さんかそん」、「しかそん」、と数えるので、本来は「しかそんようすい」と呼ばれていたと思われる。また、「四」を「し」と読むのを忌み嫌って、一方では「よんかそんようすい」とも呼ばれていたであろう。

なお、「四」を忌み嫌って、「三ヶ村」とか「五ヶ村」と名付けられることが多い中、「四ヶ村」とするのは珍しい。

谷古田用水

谷古田用水（やこたようすい）は、江戸時代の延宝8年（1680）にできた用水です。中野家の絵図では、五ヶ村用水（ごかそんようすい）と記載されています。

安永九年（一七八〇）の溝生中野家の古地図



（この下半分は増築のため所在不明）

田

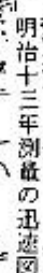
※「田」のことを「田井」や「田井」などと呼ばれていたことがわかる。

※日光街道の現在の溝生橋（かつての田井橋）まで流れ、その後は街道に沿って南下して、最終的に流れ込む。

※「田」の地名が見られるが、その地名の名残が現在の「田」である。

（溝生中野家の古地図・増築部分）

[illegible]



四、村用水

四ヶ村用水
※四ヶ村用水は、瓦曾根村の鎮守（稻荷神社）の西側の瓦曾根溜井より取水し、照蓮院の裏、西側を流れて日光街道に入り、その後は日光街道に沿って南下し、出羽城に合流し、綾瀬川に流れ注ぐ。

武

古緩瀬川

綾瀬川 ※埼玉郡と足立郡の郡境を流れた川。本来の綾瀬川の川筋。

三疊嶺

古綾瀬川

[illegible]

陆澄

38

國
 府
 院
 司
 庫

714

15

1

10

15

1

11

100

11

11

10

25

38

1

三
四

四
三
二

100

10

10

4

[illegible]

田羽希

※現在は「新生橋」と呼ばれている。
※橋の下を流れる出羽堀に日光街道から流れてきた四ツ村用水が合流。
※新井と大間野の境にある西蒲橋より下流に流れ、綾瀬川に入る現在の出羽堀は、明治にできた「新出羽堀」。

明治にできた「新田町」

越谷・春日部周辺の農作物の屎尿の供給

高崎 力

1. 江戸時代から戦後まで続く舟による屎尿の輸送

昔は、人の屎尿（糞尿）は都内（江戸）で集められ、舟運で運び、農家に販売し、畑の肥料として使われていた。都内で一軒一軒汲み取られた屎尿は肥桶に入れられ、肥桶を両端に掛けた天秤棒を肩でかつぎ、荷車に移し替えたりして運ばれ、汚穢舟（おわいぶね）の船底に集められた。そして、農村地帯である埼玉の地に川を上ってくるのである。

川沿いには、そのための屎尿貯留槽（肥溜め）の施設〈註1〉が見られ、そこに汚穢舟を横付けして、運ばれた屎尿を肥桶に汲んで貯留槽に入れ替えていた。また、中川の吉川橋上流から新川橋付近までの吉川側の川岸には汚穢舟が横付けになり、舟から直接屎尿を肥桶に汲んで、肥桶を天秤棒で担いだり、荷車に乗せたりして運んでいた〈註2〉。

このような舟による人肥の輸送が戦後まで見られていたのである。

2. 昭和初期のトラックによる屎尿の輸送

昭和初期、フォードやシボレーの外国製のトラックが手に入るようになると、舟運に代わってトラック輸送がみられるようになった。都内で集められた肥桶をトラックに積んで埼玉の地にきて、点在する屎尿貯留槽〈註3〉にそれぞれ入れられた。屎尿貯留槽の近くの農家の人々が地元の区長（現在の自治会長）から手に入れたチケットで屎尿を購入しに来て、屎尿を汲んで肥桶に入れて、天秤棒で肩に担いだり、荷車に積んだりして、自宅まで運んだのである。

3. 戦時中の鉄道による屎尿の輸送

太平洋戦争が進むにつれ、ガソリンが不足するなど、トラック輸送が不可能になると、トラックに代わって鉄道輸送になった。

中川でも下流の現在の草加・八潮・三郷あたりは、汚穢舟（おわいぶね）による輸送が可能であったが、さらに上流の越谷・春日部方面での舟運は、長い距離を曳船として遡ることになり、遡上が困難であるので、今までのトラックに代わって登場したのが、鉄道による輸送であったのである。

業平橋駅（東武鉄道開通時は浅草駅と呼ばれた）は、ここに集められた砂利を落とし入れるホッパー（一時貯留し、必要に応じて下部の口を開いて出す漏斗状の装置）の施設があり、砂利の集散基地として知られていた。そこに屎尿の集散基地が加わったのである。太平洋戦争中の昭和16年から始められ、東京の下町の墨田区・江東区の民家で汲み上げられた屎尿は、業平橋駅に集められ、東京都清掃局所有の専用の貨車（屎尿輸送用の木造タンク車）に積まれ、蒸気機関車に引かれて、北上して武里駅や七里駅まで運ばれ、現在の越谷・春日部周辺の農家や大宮周辺の農家に東京都清掃局によってそれぞれ屎尿を供給していた。この供給は戦後の昭和26年まで続いていた。

武里駅では、すぐ北の会之堀（^{あいのほり}かつての備後村の西側を流れた川の名残）に架かる現在の武里橋辺りを右折して渡って、会之堀（^{あいのほり}）に沿った地元では高道（^{たかみち}土手道）と呼ばれた道を東に進み、その道の南側、会之堀の間にある細長い屎尿貯留槽に横付けして、タンク車の底からホースで屎尿が貯留槽に入れられた。その後、貯留された屎尿は地元で販売された。この貯留槽は東京都清掃局が建設したものである。現在では、この地は春日部市南部浄水場となり、新たに作られた貯水槽が設置されている。一方、西側

にも同じく高道^{たかみち}の南側に沿って見られた貯留槽の施設は、戦後になって東武鉄道によって設置されたものである。今は住宅地となっている。そこに横付けされる有蓋の貨車は、東京都清掃局から手に入れた東武鉄道所有のタンク車である。また、七里駅の貯留槽は、ホーム北側に少し離れて平行してあった。東京都清掃局が武里駅東側の貯留槽とともに同時期に建設したものである。

**1950年代後半の業平橋駅の既に業務を終えて置き去りにされていた
屎尿輸送用木造タンク車（岡準二氏撮影、東武博物館蔵）**



（「鉄道ピクトリアル」2008年1月号臨時増刊より）

武里駅の北の会之堀に沿って設置された東西の屎尿貯留槽に溜められた屎尿は、近郷の農家の人々によって購入され、持ち帰って畑にある肥溜めに入れられる。そして1年間はそのままに熟成しておいて、それから畑に肥料として撒いた。

こうして、春日部・越谷周辺の農家にとって屎尿は畑の肥料として欠かせなく、当時の農業に大いに貢献したのである〈註4〉。

〈註1〉中川の汚穢舟が使われなくなってくると、昭和26年から数年間、汚穢舟は東京湾の浦安・行徳方面の潮干狩りに使われるようになる。参加者を募り、吉川橋のたもとを出発地にして、20人前後が甲板に乗り、屎尿の臭いが残る甲板の上で、食事をしたり、お酒を飲んだりして中川を下り、東京湾に出た。船底が砂地に付かない程度の水位（膝上）の所で舟を止め、そこから海に入り、足で砂地をさぐりながら、アサリの潮干狩りを楽しんだ。遠方には下総台地が見られた。とれたアサリは参加者にほぼ平等に分配してお土産として渡され、自宅に持ち帰った。一日かけた潮干狩り旅行であった。

〈註2〉元荒川筋では、相模町7丁目と東越谷2丁目を結ぶ人道橋の左岸下流200m、東越谷7丁目の土手道の河川敷側に、赤レンガの屎尿貯留槽が見られていた。

〈註3〉野田岩槻線の道路に南面した大仙関東支社（平方1898）や夢工房越谷店を含む奥行き90メートルの長方形の敷地には、昭和初期、南北に数本の屎尿貯留槽が並んでいて、その間にトラックが入って横付けし、運んできた屎尿を貯留槽に入れていた。道路入口側には、チケットを受け取る小屋（現在の大仙あたり）があり、その道路反対側の角地には、屎尿を買いに来る客の社交の場ともなった駄菓子屋があった。

〈註4〉畑の主な肥料は人糞であるが、水田の主な肥料は国内産の干鰯（ほしか）や満州から入ってきた豆粕（まめかす）である。豆粕は、真ん中に小さな穴があいた円盤状に固められていた。武里駅に豆粕や干鰯が積まれた貨車が入り、貨物置場で一時保管され、周辺の農家の人々に販売されていた。これらの肥料は元肥（もとごえ）として、水田に水が入った頃に、豆粕か干鰯のどちらかを砕いてばらまかれていた。

平成22年6月15日 作成

※東武鉄道の屎尿輸送と貯留槽

平成17年3月20日発行の平成16年度特別展「肥やしのチカラ」（「葛飾区郷土と天文の博物館」）の中の41頁に「東郊地域にもこの黄金列車が走っていたという言い伝えがある。現在の東武伊勢崎線の線路を走っていたそう。東武鉄道の輸送状況に関しては一切正式な記録が見当たらず、輸送開始年さえもはっきりわからないそうだが、（略）」「また、夜間に運搬を行い、杉戸・武里・大沢（現北越谷）に貯留槽を作り、そこで積み下ろしをし、東京都の関係者が同席する形で、農協で集配し、割り当てていたそうである。」としているが、高崎氏の証言によって、東武鉄道の伊勢崎線による屎尿開始年と終了年や、貯留槽を作った駅とその貯留槽の様子がわかる、今となっては貴重な資料となる。（加藤幸一）

※肥船の北限

東京から北方の埼玉方面へ屎尿を運ぶ肥船の北限は、綾瀬川流域では、越谷市内の蒲生の香取神社の東隣から日光街道の手前までであった「半七河岸」（左岸）、中川流域では、吉川市内の吉川橋^{よしかわ}の北から新川橋あたりの新川の左岸、古利根川^{ふるとねがわ}流域では、越谷市内の増森本田^{ましもりほんでん}の古利根川右岸や増森新田^{ましもりしんでん}の古利根川に注ぐ千間堀^{せんげんぼり}（新方川）^{にいがたがわ}の新田橋あたり、元荒川^{もとあらかわ}流域では、越谷市内の東越谷七丁目の西端あたりの左岸までで、ここまで肥船が上ってきていた。（加藤幸一）

※貨物自動車での下肥の販売

増森西川の山崎治平は、明治末期から舟運での下肥の引き取りと販売業に携わってきたが、昭和十一年にフォード四トン車を購入して、舟運から自動車運送に乗り換えたという。浅草松屋裏手の今戸の地に事務所を設け、中央清掃会社を設立した。

汲み取り人を四人雇入れ、集荷にあたさせた。集荷された下肥は、一台のトラックに九十樽を積み、下肥販売をした。販売先としては、江戸川区の鹿骨（ししぼね）、千葉県^{千葉県}の松戸や柏、埼玉では、岩槻、蒲生、新方（にいがた）方面であった。売上は、月五百円程度で、純益は百円位だった。

地元に販売しなかったのは、近隣の舟運での販売業者との競合を避けないからであろう。当時は、今日の交通量とは比べものにならない程の少なさだったので、勿論渋滞はなく、一日に四往復もしたという。運転手に新田村槐戸（さいかちど、現、草加市八幡町）在住の浅井助左衛門（明治三十七年生まれ）がなった。

下肥の販路もフォード車の保管場所も遠方だったので、増森の地元の人々には知られていない話である。昭和二十年三月十日、米軍機三百機が飛来したが、この時に浅草今戸の中央清掃の事務所や自動車も焼失し、その後、廃業した。（山本泰秀）

東武線の手まり唄

原 田 民 自

昭和11年（1936）に大沢町に生まれて、現在も越谷市の大沢に住んでいる女性の方が教えてくれた“東武線の手まり唄”を紹介します。

この“手まり唄”は戦前から戦後にかけて越ヶ谷町や大沢町周辺の女の子たちが“ゴムまり”をつきながら歌ったもので、教えてくれた本人も盛んにこの“手まり唄”を歌いながら“まり”をついて遊んだそう。歌詞を見ると“手まり唄”が流行っていたころの東武鉄道の駅名が次々と出てくるが、現在では失われた駅名もところどころに現れて興味を引く。

昭和四十年（一九六五）ごろまでは、越ヶ谷町や大沢町の旧街道沿いや路地裏で女の子たちのまりつき遊びが見られ“手まり唄”もよく聞かれたそうだが、交通量の増加とともに狭い道にまで車が入り、また子供たちの遊びの変化も重なり“まりつき”もできない環境になってしまった。今では“手まり唄”を口ずさむ人はもちろん、知っている人もほとんどいなくなってしまったという。

“東武線の手まり唄”の歌詞

- 1 番 こしがや がもう しんでん そうか やつか たけのつか
 にしあらい うめじま ごたんの お次は きたせんじゅ
 なかせんじゅ
- 2 番 うしだ ほりきり かねがふち たまのい ひきふね うけち
 なりひらばし すみだこうえん お次は あさくさかみなりもん

歌詞の中に出てくる駅名は以下のような変遷をたどる

なかせんじゅ	中千住駅	昭和 28 年（1953）に廃止
たまのい	玉の井駅	昭和 62 年（1987）12 月に東向島駅と改称
うけち	請地駅	昭和 22 年（1947）3 月に廃止
すみだこうえん	隅田公園駅	昭和 33 年（1958）10 月に廃止
あさくさかみなりもんえき	浅草雷門駅	昭和 20 年（1945）10 月に浅草駅に改称

越谷市郷土研究会では“わらべ歌”などの歌詞のみの収集だけでなく、音声や動画による収録に努めている。この“手まり唄”も前述の方に唄ってもらい、音声による収録をした。

当会のホームページ（<http://www.geocities.jp/a1115b/>）で視聴することができる。

越谷市内の逆川の水量減少

山本泰秀

越谷を流れる逆川の取水制限は平成 15 年から行なわれる様になり、水量が減った。

それは、東京都に水道水として水の供給を増加したと深く関係している。江戸川の水は、東京都の水道水として金町浄水場で古くから取水されていた。最近では、埼玉県も金町浄水場の上流にある庄和町浄水場で江戸川の水を取水して水道水としている。埼玉県側での庄和浄水場の使用水量の頻度が増すにつれて、金町浄水場の取水が減少した。その為江戸川からの二郷半領の水田用水の取水を取りやめて、古利根川から取水し始めた。その為、逆川の水量が減ったのである。野田橋上流 250m 先の金杉にある江戸川揚水機場、玉葉橋下流 250m 先の深井新田の 2ヶ所地点の江戸川から取水した水は、二郷半領周辺、松伏、吉川市、三郷市の水田を潤していた。しかし、江戸川からの取水を取りやめ、松伏町松伏と大川戸境界地点の二郷半揚水機場での古利根川取水に切り替えたのである。当然、古利根川の水量減少が起き、ひいては逆川の水量減少がおきてきた。そこで、増林の水田耕作者は水をさらに大切にせざるを得なくなり、田圃の水の垂れ流しを規制し、さらに、田圃の落ち口に止水弁を設け取水制限を始めた。逆川の水量減少は免れられない事実となった。昔、豊富に使用できた水を考えながら使うことになった。

次に、浄水場について述べたいと思う。東京都が江戸川の水利権をもったのは、かなり古い。金町浄水場は大正 15 年に江戸川上水道町村組合によって設立された。昭和 7 年東京市水道局、同 18 年 7 月 1 日東京都水道局所管となる。古利根川下流中川、江戸川系緊急拡張工事が昭和 39 年 6 月 15 日にされ、三郷放水路で灌漑期（5 月 1 日～9 月 30 日）に江戸川から水道水として取水された。現在東京都で使用される水道水の 16% 量が三郷浄水場で賄われ、金町浄水場では、21.9% 三郷、金町両浄水場では合わせて 37.9% もの水が墨田区、江東区、葛飾区、江戸川区、足立区、荒川区の全域、台東区の大部分又、北区及び中央区の一部、約 250 万人に給水されている。東京都民に馴染の深い玉川浄水場は、原水の水質悪化に伴ない現在水道水としては、すでに使用されてず、工業用水道事業用として三園浄水場に送水している。下表から東京都の水道水の約 80% にもおよぶ水は利根川を水源としている。異状気象の折、渇水期における水量確保不安を抱く東京都がいかに利根川水系を重要としているかが理解できる。

東京都水道局の浄水場一覧

平成 19 年 10 月 18 日現在

水系	浄水場名	施設能 (m ³ /日)	比率 (%)	浄水場別	水系別
利根川	金町	1,500,000	21.9		79.9
	三郷	1,100,000	16.0		
	朝霞	1,700,000	24.8		
	三園	300,000	4.4		
	東村山	880,000	12.8		
多摩川		385,000	5.6		17.0
	小作	280,000	4.1		
	境	315,000	4.6		
	砧	114,500	1.7		
	砧 下	70,000	1.0		
	玉川	(152,500)	—		
相模川	長沢	200,000	2.9		2.9
地下水	杉並	15,000	0.2		0.2
計		6,859,500	100.0		100.0

庄和浄水場

埼玉県東部地域の水源を地下水から河川水利用に切り換えるため、昭和45年県営東部第一水道建設に着工、北葛飾郡庄和町新宿新田先の江戸川右岸から取水し、草加、越谷、春日部、岩槻など、人口の急増する六市三町、当時で110万人を対象に1日の給水能力35万立方メートルとし、昭和49年4月に一部給水を開始した。松伏、越谷水道組合で県水の受給量は当初1日22,800立方メートルだったが、昭和50年度には全給水量の52%も占める様になった。現在（平成19年度）では、県水の受水量は凡そ、1日101,000立方メートルで水源内訳は県水約92%、地下水（自己水）約8%である。

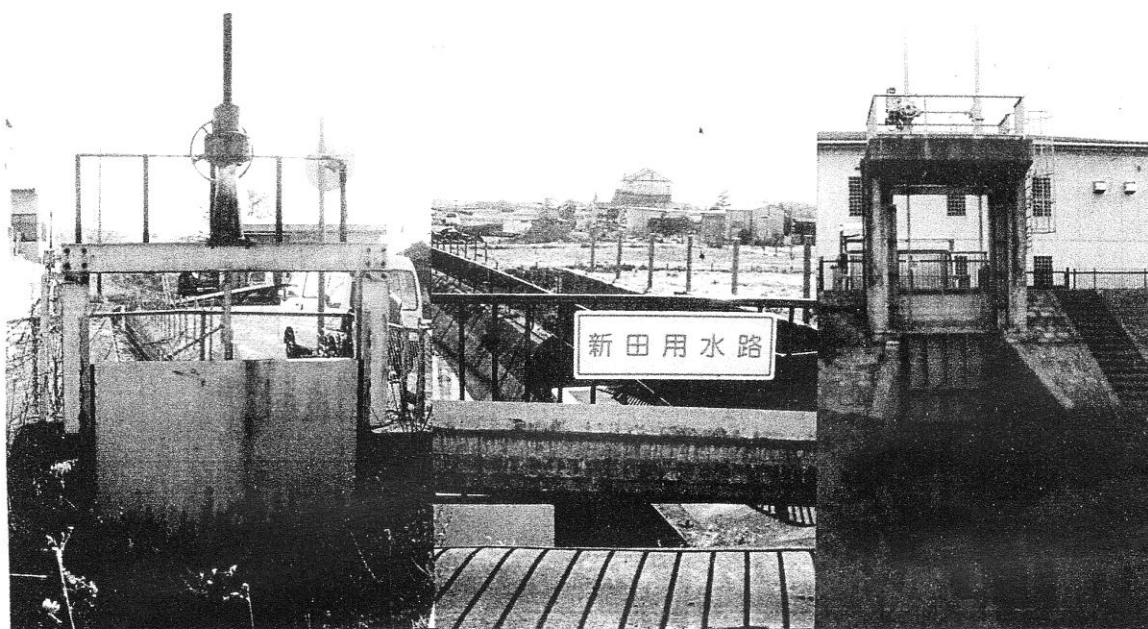
江戸川揚水機場

（松伏町 金杉）

（吉川市 深井新田）

二郷半領揚水機場

（松伏町 大川戸）



二郷半領揚水機場揭示板

利根中央農業水利事業による移設

二郷半領揚水機場は、老朽化した水利施設改修、用水系統の再編、農業用水への転用などを目的とした「利根中央農業水利事業」（平成4～15年）によって移設されたものです。

江戸川の河床低下の為、取水源を大落古利根川に変更。かんがい期には最大毎秒4,199リットルを揚水し、二郷半領導水路から二郷半領用水路、新田用水路、および各支線水路を経て、松伏町、吉川市、三郷市の1,317haの農地をかんがいでいる。

葛西羽生領島中領用水路土地改良区連合

〔参考文献〕 金町浄水場概要 東京都水道局 埼玉大百科事典 埼玉新聞社
こしまつ水道 2009 越谷松伏水道企業団

平成21年11月18日